

奇兵隊を創設した村塾の双璧

たか すぎ しん さく
高 杉 晋 作



(春風文庫蔵)

【生没年】1839年～1867年
(天保10～慶応3)

【享年】29

【誕生地】長門国萩屋横町(萩市)

【墓】下関市吉田(東行庵)
下関市新地町(桜山神社)
萩市椿東(護国山団子岩)
京都市東山区(霊山墓地)



萩博物館

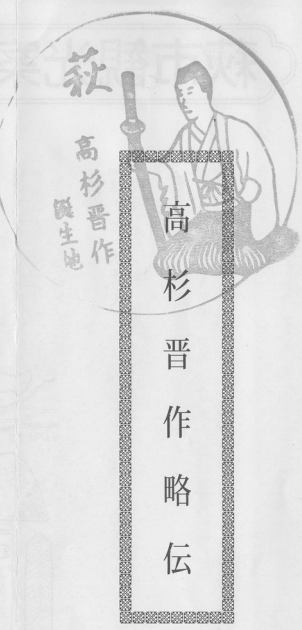
高杉晋作

諱は春風。藩校明倫館に学び、安政元年

(1854)には江戸で黒船騒動を体験。安政4年、吉田松陰が主宰する松下村塾に入り頭角を表し、久坂玄瑞と並び「松門の竜虎」と称された。

文久元年(1861)、藩主世子(世継ぎ)の小姓役として初出仕。同2年に藩命により上海渡航し、アヘン戦争後、欧米列強の支配を受ける中国の実情を見て危機感を強め帰国。12月には久坂や井上馨(聞多)らと品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き打ちした。しかし自らの富国強兵策が藩に受け入れられぬと知るや文久3年3月、京都で剃髪、10年の暇を貰い東行と号し萩で隠棲する。ところが同年5月、藩が関門海峡で攘夷を断行するや起用され、下関防御を任されて6月に奇兵隊を結成。軍力不足を補うため、庶民を動員した点が画期的だった。

勅命を奉じた長州征伐軍に屈した藩政府を打倒すべく元治元年(1864)12月、遊撃隊などを率いて下関で挙兵。大田・絵堂の内戦を経て、藩論は「武備恭順」に統一される。慶応2年(1866)、再び攻め寄せた長州征伐軍撃退の指揮を小倉口で執るも、下関林家離れて病死。



- 一、高杉晋作墓(胎髪・臍帯を納めた招魂墓)
 - 二、明倫館跡
 - 三、松下村塾
 - 四、萩城跡
- 萩市内の関係史跡

この旧宅は家禄二百石を受けていた父高杉小忠太宅で、藩政時代は約五〇〇坪の広さがありましたが、現在の敷地はその南半分で現存する当時の建物としては座敷(六畳床間付)・次の間(六畳)・居間二(六畳、四畳半)・小室三畳のほかには玄間が残っています。土蔵納屋がありました。現存していません。庭園に鎮守、裏庭には井戸がそのまま残っています。

旧宅について

遺言により遺体は吉田村(下関市)の清水山に葬られました。明治二十四年、生前の功勞に対して正四位が贈られました。

名は春風、字は暢夫、晋作は通称ですが最もよく知られています。東行・西海一狂生・東洋一狂生・楠樹小史などと号しました。天保十年(一八三九)八月二十日萩藩士高杉小忠太春樹(二百石)・みち(大西家の出)の長男として、ここ萩城下菊屋横丁の家で生まれました。幼少の頃は私塾に学び、のち藩校明倫館に入學、十九歳のとき吉田松陰の松下村塾に入りました。文久元年(一八六一)世子毛利定広の小姓役を命ぜられ、翌年藩命で幕使とともに上海に渡航し、海外の諸情勢をつかみ帰国後、尊攘論の急先鋒として活躍しました。文久三年(一八六三)下関の外国船攻撃にあたり、奇兵隊を組織して総督に命ぜられました。奇兵隊は我国で最初の身分を問わない軍隊で、これにならう諸隊が続出して、長州藩の反幕勢力の軍事的基盤として明治維新に大きな働きをしました。

高杉は一時脱藩した罪で野山獄に投げられましたが、元治元年(一八六四)四国連合艦隊の下関来襲にあたり許され、再起用され、講和条約の正使となつて交渉し、危急を救いました。しかし禁門の変後、藩首脳は保守派によつて占められたため、危機を感じ、九州に脱出しました。やがて機を見て帰国、奇兵隊を指揮し、長府功山寺にて決起、疾風の勢いで諸地を転戦し保守派を一掃、藩論を討幕に統一しました。また慶応二年(一八六六)一月には薩摩藩との薩長同盟に尽力し、同年六月の第二次長州征伐(四境戦争)には、全藩を指揮し、自らは大島郡の久賀沖に碇泊中の幕府軍艦四隻を奇襲攻撃して撃沈させ、小倉口攻めにも活躍しました。しかし、七月頃から体調の悪さを訴え、翌年四月十四日下関の新地に享年二十九才の若さで病死しました。

萩市内の関係史跡

- 一、高杉晋作墓(胎髪・臍帯を納めた招魂墓)
- 二、明倫館跡
- 三、松下村塾
- 四、萩城跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡

萩市内の関係史跡



150th ANNIVERSARY



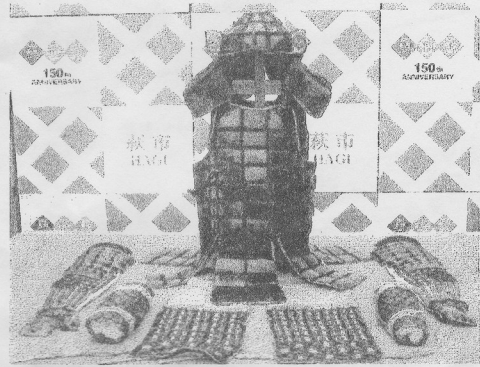
高杉晋作所用の甲冑、特別公開

9月13日、萩市民から、博物館資料として展示等に役立ててほしいと、高杉晋作所用の甲冑（周布政之助が晋作に贈った甲冑）が萩市に寄贈されました。高杉晋作が実際に使用したことが分かっている甲冑は二領しか現存しておらず、そのひとつとして貴重です。

高杉晋作着用の甲冑

萩博物館蔵（大谷和雄氏寄贈）

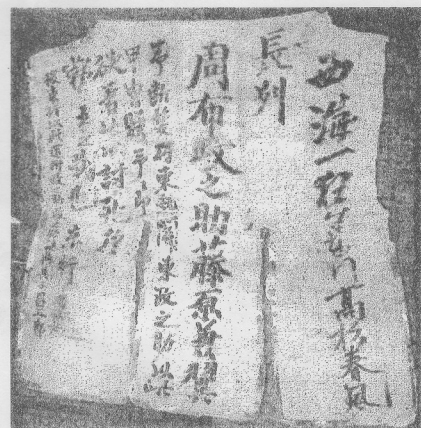
文久3年(1863)3月、京都で剃髪して「東行」と号したさい、藩重役の周布政之助から贈られた、実戦向きのシンプルな畳具足(重量は全部で約7キログラム)。同年6月、奇兵隊を結成したさい、馬関(下関)の陣中で着用していたことが史料「馬関攘夷従軍筆記」から分かる。奇兵隊といえば近代的な軍隊というイメージが強いが、当初はこのような旧時代のもも使っていたのだ。奇兵隊総督を辞した晋作は政務座の仕事に専念するようになり、同年11月、周布に返却された。いまから150年前の夏、晋作の汗をたっぷり吸い込んだと思われる甲冑である。



甲冑の裏布

萩博物館蔵（大谷和雄氏寄贈）

高杉晋作が周布政之助から贈られた甲冑の裏布部分(もとは胴部分の内側に張られていたが、旧蔵者がはずしたもの)。周布から晋作に贈られ、また周布に返されて、その子昌三郎に譲られた経緯が記されており興味深い。晋作はこの甲冑を着て「関東」で「勤王の戦」を起こして死ぬのだと述べている。幕府との戦いを決意し、「東行」と号していたことがうかがえる。

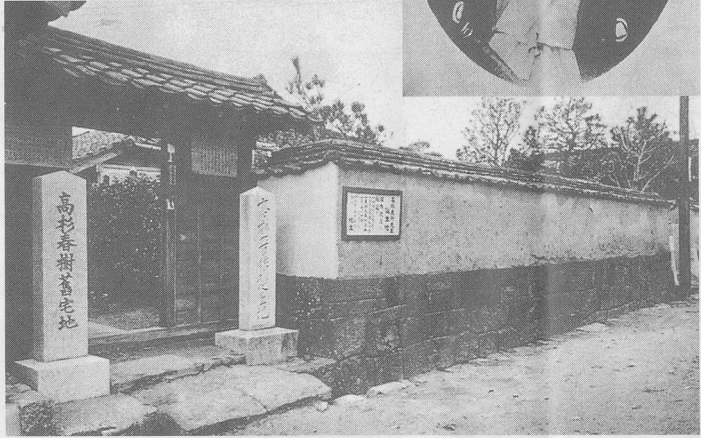
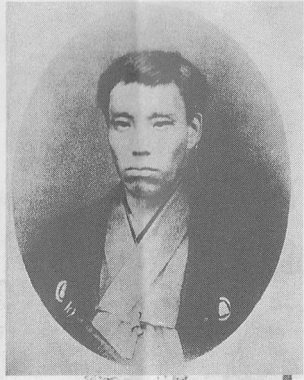


「西海一狂生東行高杉春風」(晋作筆)

「長州 周布政之助藤原兼翼」(周布筆)

「予断髪将東趣関東、政之助以此甲冑贈予、々即欲着此以討死於 勤王之戦也、東行自題」(晋作筆)

「後東行此還附政之助、政之助譲与其子昌三郎」(周布筆)



(備考) なお萩市外の主な関係史跡としては

- ・高杉晋作墓 (下関市吉田清水)
- ・奇兵隊拳兵地 (下関市長府功山寺)
- ・大田絵堂戦跡 (美祢市美東町)

などがあります。

文久三年(一八六三)三月十六日、
頭をそって東行と号したとき京都にて詠んだ歌

西へ行く人をしたひて東行く
心の底そ神や知るらむ

(意) 西行を慕って頭を丸めたけれども自分の心は逆に東へ
行くのだ。その心は神だけが知っているだろう。

国指定史跡萩城城下町

高杉晋作誕生地発行

萩市南古萩町二三番地